

松田静心の空

松田静心の絵の中に「そら」がある。画面の95%以上を占めると思われる広々とした空が…。すくなくとも、わたしの観ることができた最近の作品ではそうだ。

漢字の「空」は、「から」と読ませれば、何もない空っぽの意であるが、「くう」ならば、般若心経では「空不異色……色即是空」であって、「空」は「色」即ち現前する森羅万象の、絶え間なく変幻する無常の場ということになる。

更に、「場」を「間」と同列に置いて「空」にくっ付ければ、それは「空間」。英語なら「space」であって、悠久の時間、無限の奥行きをもった広大なわれらが宇宙をも意味し、同時にそれは、絵画が、自ら狭く二次元に限定して取り込み、昔から今まで、連綿と格闘し続けている厳しい相手だ。

あるいは、「そら」に「こと」がぶら下がれば、それは忽ち「そらごと＝つくりごと・うそっぱち」つまり、虚構と呼ばれフィクションと称されるものになるが、これは、真実を現すために巧妙な目眩ましの術を駆使する「芸術」にとっての不可欠な属性である。

要するに「そら」とは、このように無碍の相を持った面白いところなのだ。

どうやら松田静心は、その面白い「空」に惹かれているらしい。そしてそれに、真っ正直に、かつ、真っ正面から立ち向おうとしているらしい。まことに立派、真摯な態度であるというほかはない。思うに、真摯であればあるだけ、おそらく「空」は同じ真摯なその「色」を見せるだろう。温和しく立ち向おうとすれば温和しい色を、真面目に立ち向おうとすれば真面目な相を……。けれどもその限りにおいて、空は——「空」であり且つ「色」でもある掴み所のない空——は容易にその真の正体を現してくれないかも知れない。つまり、空——無限の広がりとお行きを秘めた本来の空——は、対し方次第でどんな相貌にでもなり得るような、とても一筋縄ではゆかぬ相手だ、ということである。

そのためには、ただ温和しく立ち向おう、とするのではなく、すべからく、決然と強く立ち向わねばならぬまい。困難は承知の上、血を流すほどの覚悟で、容赦なく相手と斬り結ばねばなるまい。

そうすれば、松田静心の空は、一段と見応えのある空間、手応えのある作品になるだろう。観る側としてはそう願いたい。心静かに観られる絵より、わたしは心の震えるような絵を観たいのである。むろんこれは、わたしだけの偏った願いかもしれない……けれど。

美術家
池田龍雄